

# 西行の和歌

—出家と草庵をめぐって—

鈴木徳男

一

我々が西行について知る手だては、限られた史料と詠み残している和歌作品（二千二百首余り）による他はない。和歌を丹念に解釈して西行の人間に迫ろうとする試みは、ごく最近にはじまることであるし（その端緒は明治時代の末年、藤岡作太郎の西行論）、伝記についての考察も同様で和歌を検討することによってようやく輪郭が描かれるようになった。それまでの西行像は伝説に包まれていたのである。

多くの研究書を見ても、西行の和歌を論ずるとき、西行の境涯に触れずに済ますことができない現状である。西行の和歌と、このような研究史上における西行の人間像の追究との関係が皮肉にも中世歌人西行をかえって不可解な存在にする要素になっていると思う。作品と作者の生き方が互いに不可欠な関係として表裏をなしているという事情は、当たり前のことのものであって、実は中世和歌（および新古今時代以降の和歌を念頭におく言い方）においては特殊なのである。中世において、宮廷やその周辺で詠まれる和歌の場合、作者の伝記が、たとえ詳細にわたり知ることができても、和歌の解釈に直接に立ち入ってくることは、ほとんどないと言って良いように思う。当時の作歌方法の中心である題詠では、題の心に即した言語表現が構築するイメージを把握すれば、その彫琢された詩的世界は十分理解

できるのであつて、詠作時点が作者の人生のどのような位置にあらうとも、その影響を考慮せずに作品を鑑賞できる。作者の性格、経験や生活ぶりなどは消去されて詠作の上に反映しない、あるいは反映したとしても、それらを捨象しても享受できる文芸的方法が確立されていたのである。作品内容と作者は、詠みだした時点で難れてしまい、ほとんど無関係になる。作者としてその和歌作品に関して問題になるのは、詠作に際してのテクニクだけであらう。（歌人研究や歌壇史研究が無効だというのはない。文学史をひもとけば明白である。ただ一首を抽出して享受する場合に、当時の作歌方法に照らしてみると、評価基準が作者の实体とは別の次元に存すると言いたいのである。）ところが、西行は違っている。西行の和歌には背後に詠み出した西行自身がついてまわり、作品を味わうものに、いわば生々しい西行像を強要するのである。

そこで、和歌を読むにあたり、詠作活動と切り離すことの出来ない西行の人生とはどのようなものであつたのか、概観してみる必要がある。生年は元永元年（一一一八）、没年は建久元年（一一九〇）。生まれは平清盛と同じ年である。翌年には顕仁（のちの崇徳院）が誕生している。まさに、七十三年の生涯は、平安時代末の動乱期にあたり、保元の乱は三十九歳、平治の乱は四十二歳、治承・寿永の源平の争乱は六十代の晩年である。

西行の生涯は五区分されて考えられている。川田順による分類を基にするが、妥当と認められるものと思う。

一 在俗時代（一歳から二十三歳）

二 出家直後時代（二十四歳から三十歳）

三 高野山中心時代前期（三十一歳から四十九歳）

四 高野山中心時代後期（五十歳から六十二歳）

五 晩年時代（六十三歳から七十三歳）

以上の区分の目安を示す。二十三歳の時、出家して京都近郊での草庵生活に入る。三十歳頃までに初度陸奥修行をして、高野山に登り、以後ここを中心に活動する。この間、熊野、大峰の修行をしたと思われる、また真言密教を学習した。五十歳のころ、讃岐行を行う。目的は、弘法大師遺跡巡礼と崇徳院の展墓であった。六十三歳ころ、高野山を離れ、伊勢に移る。六十九歳の時、東大寺再建勸進のため再度陸奥行。建久元年二月十六日、弘川寺にて入寂。

## 二

このうち、まず問題になるのは、出家である。出家通世は西行のその後の人生を決定づけた一大事である。頼長の『台記』永治二年三月十五日の条から出家の事情が知られ、時期は保延六年（『百練抄』によれば十月十五日、慈鎮和尚自歌合十禅師十三番左歌〈新古今集・雑下にも〉を参考にする）と月の照る日であったらしい）である。『台記』によれば、「重代の勇士をもつて法皇に仕へ、俗時より心を仏道に入る。家富み、年若く、心に愁ひなきに、遂にもつて遁世す。人これを嘆美するなり。」とあり、仏道に心を入れての出家であることが知られる。また、人々が西行の出家を嘆美したと言う。西行が三十四歳の時に撰進された『詞花集』に読み人知らずであるが、「身を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ」が入集していることから察することができる。<sup>1</sup>観念的過ぎるくらいはあるが、このような出家者の心境を詠んだ作が、匿名であるけれども、勅撰集にとられている事実は、当時の西行の世間的評価をうかがわせる。

出家の動機を探るには、伝承をふまえつつも、主として、出家前後の詠と認められる西行の和歌作品を解釈し内容を吟味する方法をとる他はない。ただ、当時の出家をかんがえるには、西行個人における問題であると同時に、時流における類型に関わる問題でもあることを配慮すべきだと思われる。西行の内面的葛藤と社会的理解との間に相違が

有り得ることは考えておかねばならない。

次に出家の動機をめぐる諸説を整理しておく。

川田順『西行』（昭和一四年）は、従来の考察をふまえつつ次の四説にまとめている。一般厭世説（生活思想ともに動揺し天変地異相次ぐ退廃的過渡期における時代の普通の無常観による。『西行物語』にもみえる）、恋愛原因説（家集中の恋歌に告白されている心情から読みとる。『源平盛衰記』に載る）、政治原因説（乱世の兆しのあつた当時の政治情勢から身を遠ざけるため、『山家集』中に一四二〇、一四二一のような歌が見える）、総合原因説（一般厭世観、政治原因の悩みは遠因で、悲恋の苦しみは近因）などをあげる。

安田章生『西行』（昭和四八年）は、詩人的なほげしい性格と結びついた深い道心が根本にあり、こうした根本的な事の他に、失恋や近親者の死などの直接的原因があつたとする（山本幸一の指摘する孤児的陰影のつきまとう家庭環境にも注意する）。同じく『西行と定家』（昭和五〇年）には「当時の皇室の内部では鳥羽院と崇徳院との対立があつた。鳥羽院に仕えながら、崇徳院に深い同情の念を抱いていた西行は、そうした皇室内部の事情からも厭世の思いを強く抱くにいたつたに違いない。」とある。

窪田章一郎『西行の研究』（昭和三六年）は、西行の特色ある歌風は出家生活に密接であり出家と作歌は一致しており、しいて他に動機、原因を求めるよりも佐藤義清（西行の俗名）の人間性、資質の中に求めるべきものであるとして、出家という行為は自身を自由にし束縛から放つことであり自己を遂げ自己を解放することに価値ある生き方を求めたと述べ、純粹な信仰による文学表現の深化を目標にした出家とする。

久保田淳『新古今歌人の研究』（昭和四八年）は、「佐藤義清は北面の武士であるにも拘らず、仏道に関心の深い変わった男だったのであろう。ただ、空仁の生活や東山の「阿みだ房」の生活への憧憬を歌った作などから考えると、

その関心は、主として、信仰そのものの、思想そのものではなく、むしろ出家者としての生き方にあったのではないかと思うのである」と述べ、この憧憬の念は自己変革への熱望であり、かれの資質の重要な一面に若々しい浪漫的精神があったとする（『西行と草庵と歌と』『解釈と鑑賞』昭和五十一年六月号においても「草庵生活者との接触が、義清を出家に踏み切らせたかなり直接的動機付けになっている」と説く）。

目崎徳衛『西行の思想史的研究』（昭和五十三年）は「西行は数奇の遁世者の典型と言うべき存在である。遁世の原因はここに求めるのが何より自然ではなからうか。」と述べ、数奇の遁世者の系譜を歴史的にたどっている。

窪田が「むしろ出家の理由を考えるには、出家以後の行為・生活に解答を求めるのが正当であろう」と述べるように、出家直後の草庵生活を見ると、根本に道心があるにしても、数奇の遁世者の面影が濃厚であるのは確かなようで、目崎が説く「数奇の遁世」は、信仰より生き方や文学的資質を優先させる点で、結果的には、窪田、久保田の各説を延長線上に受けるものと考えられる。

これに対して、山本幸一『西行和歌の形成と受容』（昭和六十二年）は出家した原因・理由はついに実証されぬ謎というよりはかはないとしながら、出家遁世の心理と論理また場面・状況について考察したうえで「出家の理由・原因として『数奇』を強調すれば、出家それ自体の自己目的性、すなわち、当初の求道の意志を排除してしまうことになりかねない」と述べ、出家以前の草庵生活へのあこがれは、草庵の数奇生活へのあこがれよりも素朴な草庵生活において求道を実践する者への羨望ではないかと、求道の機因を説いた。さらに、山本説を受けて、萩原昌好は在俗時における数奇が見られないとし、動機と生き方は別に論ずべきかとして「和歌の詠みぶりから察して、西行は（別の動機による）出家という行為を経て後、数奇者としての眼が開かれたと見るべきであって、数奇者として生きる為に出家したのではないと考える。」と述べて、数奇の遁世を批判し、恋愛（失恋）説や資質的に仏道に心ひかれていた

という説を主張した（『西行はなぜ出家しなければならなかったか』『国文学』昭和五十六年六月号）。

山田昭全は西行を心の詩人とみて、心の歌の具体例をあげて説明し、それをてがかりに出家の意味を考察、「西行はもともと稀に見る内面直視型の人間であり、その上強烈な自我意識の持ち主であった。その魂は家族や周囲の環境に制約されることをきらい、激しく自由を求め続けたのであった。この強烈な魂の爆発が二十三歳という若さで出家させることとなる。」と結論している（『佐藤義清と西行と―西行出家の意味』『解釈と鑑賞』昭和五十一年六月号）。

気がついた範囲で出家をめぐる主な論説を簡単にたどってみた。諸説を網羅したわけではなく、取り上げた説も誤解なく紹介し得たか心許ない次第であるが、西行の出家の動機をめぐる諸説が言及するところによって、西行の詩人的な資質や出家遁世に関する当時の諸事情について理解できるところと思う。結局、西行の出家の原因は謎のままなのであるが、出家直後の生活が山里の草庵生活であつたという認識は認めてよいように思われる。出家した西行は新しい生き方として、ともかく草庵生活を得たといえるだろう。

なお、在俗時の西行、佐藤義清は左兵衛尉であり、鳥羽院の下北面に勤仕、徳大寺家の家司的な生活もしていた。義清は宮廷周辺に奉仕する武官、いわゆる武士であつた。晩年の頼朝との会見（『吾妻鏡』文治二年八月十六日条）からも察せられるように、先祖の藤原秀郷（俵藤太）に誇りを抱いていた。西行における出家の意味を把握するには、このような武士的資質をも看過すべきではないと考える。妻子のいたらしいこともわかっている（『発心集』巻六「西行女子出家事」など）。こうした在俗時の環境を捨てて出家遁世したのである。宮廷周辺から山里へ、いわば生き方の百八十度の転換を成し遂げたわけである。『西行物語』にあるように、出家を決心したかれが煩惱のきづなを絶つために出迎えに出て袖に取り付く四歳の娘を縁から下へ蹴落したというほどの激しさは事実ではないにしても、調和した安定を破り一つの道に徹しようとする中世的生き方は認められるであろう。そこに、武士的資質を見いだしたいと

思う。

注(1) 身を捨て出家する人は本当に身を捨てたことにならない、捨てずに俗世にいる人こそ身をいたずらに捨てていることになるのだの意で、出家後の感懐とする。なお、逆に形だけの出家ではなく俗世にとどまることの方が本当の出家であるという別解もあるがとらない。この歌に関しては井上宗雄・片野達郎校注『詞花和歌集』の補注に詳細に説かれている。

注(2) 谷山茂校注『歌合集』中世篇(日本古典文学大系)補注は調和を破つても徹底することを中世的だと指摘している。

### 三

出家後、京都近郊での草庵生活が、しばらく西行の生活の中心であった。歌枕探訪を主目的にした初度陸奥修行以後に高野山に登るまで続く。しかし、高野山を中心にした生活には、それまでと異質なものがうかがえる。すなわち、高野山中心の西行の生活は、草庵生活には変わりがないが、数奇より仏道の比重が重くなってきたと推察されるのである。真言密教に帰依して修行と学習に励んだらしく、かなり高度な『法華経』二十八品歌を詠むまでになっている(山田昭全『西行の和歌と仏教』昭和六二年)。大峰修行もこの間であろう(『山家集』に峰入りの折りの詠歌群がみえる、また『古今著聞集』第二釈教によれば、宗南坊僧都行宗を先達として二度の峰入りをはたしたと言う)。さらには、やがて弘法大師を慕い、四国へ下向したのである。

以上のような西行の出家をふまえて、出家後の山里での草庵生活の文学的意味を検討し、草庵生活を基盤にして詠

まれた和歌、とくに四季の景物を詠んだ作品を取り上げて、西行の和歌の特徴のひとつを確認してみたく思う。

ところで、西行の草庵はどのようなものであったか。例えば、鴨長明が『方丈記』で詳細に記すような草庵であったか、質素閑寂を旨としたものには違いなから、長明の日野の草庵とそう大差はなかっただろうと想像されるが、はつきりしない。『西行上人談抄』によると、二見が浦の草庵は浜荻を敷いた住居で、自然石を硯に用い、机代わりは花籠や扇であったと伝える。

また、『山家集』などから地名を拾うと、草庵を結んだ具体的な場所としては、東山、嵯峨野、あるいは吉野などが挙げられる。一所止住を嫌う隠遁の性質上、ひとところに庵を結び、久しく定住することはなかったように思われる。少なくとも西行の場合は、各地の寺社や歌枕である景勝の地をあちらこちらに遊覧や修業に出歩くことが多かった。時に数奇者の集まる歌会などにも出席している。

こうした形で営まれた山里の草庵生活とは、文学的見地からみて、どのような意義があったのか、文学（作歌活動）と山里の草庵生活の関係を先ず考えてみたい。「山里」の沿革は、すでに家永三郎『日本思想史における宗教的自然観の展開』（昭和一九年）に説かれている。試みに『古今集』から山里を詠んだ和歌を挙げてみる。

棟 梁

春たてど 花もにははぬ 山里は もの憂かる音に 鶯ぞ鳴く (一五)

亭子院の歌合の時よめる 伊 勢

見る人も なき山里の 桜花 ほかの散りなむ 後ぞ咲かまし (六八)



読人不知

ひぐらしの 鳴く山里の 夕暮れは 風よりほかに とふ人もなし (二〇五)

是貞親王の家の歌合の歌

忠 岑

山里は 秋こそことに わびしけれ 鹿の鳴く音に 目をさましつつ (二一四)

冬の歌とてよめる

源宗于朝臣

山里は 冬ぞさびしさ まさりける 人めも草も かれぬと思へば (三一五)

読人不知

白雪の 降りてつもれる 山里は 住む人さへや おもひ消ゆらむ (三二八)

読人不知

山里は もののわびしき ことこそあれ 世の憂きよりは 住みよかりけり (九四四)

山里は孤絶したわびしく寂しいところであった。また、西行歌から例をとると『山家集』中巻の最後に「題知らず」として一括された歌群は山里の生活を詠じた作である。はじめの数首を挙げる。

題しらず

木枯に 木の葉の落つる 山里は 涙こそさへ もろくなりけれ (九三五)

峯わたる 嵐はげしき 山里に 添へて聞ゆる 滝川の水 (九三六)

とふ人も 思ひ絶えたる 山里の さびしさなくば 住み憂からまし (九三七)

暁の 嵐にたぐふ 鐘の音を 心のそこに こたへてぞ聞く (九三八)

待たれつる 入相の鐘の 音すなり 明日もやあらば 聞かんとすらん (九三九)

松風の 音あはれなる 山里に さびしさ添ふる ひぐらしの声 (九四〇)

谷の間に ひとりぞ松も 立てりける われのみ友は なきかと思へば (九四一)

入日さす 山のあなたは 知らねども 心をかねて 送りおきつる (九四二)

なにとなく 汲むたびに澄む 心かな 岩井の水に 影うつしつ (九四三)

水の音は さびしき庵の 友なれや 峯の嵐の 絶え間絶え間に (九四四)

それらの歌を見ると山里の草庵生活の基調が理解できる。俗を捨ててきびしい孤独の中で心を澄まし、周囲の自然を静かな境地で見つめている。九三七の作について、家永前掲書は「寂しさを全生命とする『山里』はいはば自然のきびしさの象徴であり、それ故に又無限の魅力をも具備してゐたのであらう。」と述べて「この逆接的な山里の魅力はその矛盾の極まる処、俄然」この作の「玲瓏たる境地を導くに至るのであった」と評している。九三七だけでなく、歌群全体において、寂寥の意味を積極的に見いだしている処が注目される。西行の文学観の要点はまさしく寂寥の発見にあったと言つていいだろう。寂しさをひとつの美意識にまで高め、それを自然とむきあううちに宗教的にもつきつめたといえるだろう。「浮かれいづる」文学的資質の上に、山里の草庵生活によつて寂寥感を実践的に体得した西行の眼は、桜の優雅、月の清澄さといった自然美を、さらに深めたのである。のみならず、歌を詠むという表現行為によつて、そういう境地をさらに切り開こうとする姿勢がみられる。こうした求道的ともいえる姿勢は西行の和歌に古典主義的な方法によりながらも主体的個性をはつきりと主張する独特の創作方法を与えている。以上が山里の草庵生活の文学的意味であつたと考える。

#### 四

結論を早急に述べてしまった感があるが、今少し具体的に草庵生活を基盤にして詠まれた西行の和歌を見て、それを補ふこととする。『山家集』中の作品を検討するが、その場合各作品の詠作年時はほとんど不明とせざるを得ない。したがつて、ある特定の期間における草庵生活という想定は無理なのであるが、時期を不問にした上で山里の草庵生

活の中で詠まれたという前提を重視して論を進めることとする。

現存の『山家集』（新潮日本古典集成による、底本は陽明文庫本）の構成は次のようである。

上巻	春	一七三首
夏	八〇首	
秋	二二七首	
冬	八七首	
中巻	恋	一三七首
雑	三三〇首	
下巻	雑	一九九首
恋	百十首	一一〇首
雑	一〇二首	
百首	一〇〇首	

一見すると、勅撰集の構成のようで、伝統的な体裁を持つ。しかし、作品をつぶさに見れば、山家集という書名が示すように、山居の出家遁世者の詠作が編纂されているという特異な性格が明らかに看取できる。どの作品にも、背景に草庵生活が存する。この体裁と内容に西行の庶機する特色があったと思われる。つまり、正統な和歌を独自の境地で詠む態度である。西行の独自性という意味では、その真骨頂は雑の歌に見いだせるとすべきかも知れない。『山家集』の歌数を見ても、雑歌に秀逸の多い『新古今集』入集歌をみても、それはわかる。けれども、正統な和歌の素材を西行なりの立場でどのようにこなしたかを考察する意味で、ここでは伝統的に詠まれている自然の景物を取材し

ている四季の歌を検討する。

四季部の歌材配列を主題によって一覧すると次のようになる。

春部

立春	一〇一三
子の日	一四一七
若菜	一八二三
鶯	二四三〇
雉子	三一三四
梅	三五四四
春雨	四五
帰雁	四六四八
呼子鳥	四九
苗代	五〇
春月	五一
柳	五二五五
桜	五六一五八〔五六六一待花、六二一〇四咲花、一〇五一一四二散花、一四三一一五七 花五首、一五八散りて後花を思ふ〕
堇	一五九一六〇
早蕨	一六一
燕子花	一六二
躑躅	一六三・一六四
山吹	一六五・一六六
蛙	一六七・一六八
郭公	一六九〔春のうちに郭公を聞く〕
暮春	一七〇一七三

夏部

更衣	一七四	
夏草	一七五	
卯の花	一七六	一七八
郭公	一七九	二〇〇
菖蒲	二〇一	二〇六
五月雨	二〇七	二二九
泉	二三〇	
水辺納涼	二三一	
深山水鶏	二三二	
樽の木陰	二三三	
夏草	二三四	二三八
夏の短夜	二三九	二四〇
夏月	二四一	二四九
風	二五〇	二五二
六月祓	二五三	
		〔二五〇涼風如秋、二五一松風如秋〕
		〔二三九照射〕
		〔二三四・二三五撫子〕
		水辺、木陰に涼を求める歌

秋部

秋風(初秋)	二五四	二五七
七夕	二五八	二六三
草花(秋草)	二六四	二六八
萩	二六九	二七二
薄	二七三	二七四

刈萱	二七五
女郎花	二七六、二八四
萩	二八五、二八八
秋夕	二八九、二九二
秋の長夜	二九三
露	二九四
秋蟬	二九五
秋歌十首	二九六、三〇五(二九六風、二九七薄、二九八虫の音、二九九萩(夕暮)、三〇〇鹿(霧)三〇一時雨、三〇二、三〇三、三〇四、三〇五暮秋)
月	三〇六、四一八
雁	四一九、四二四
霧	四二五、四二八
鹿	四二九、四四一
砧	四四二、四四三
虫	四四四、四六三
秋夕	四六四、四六五
菊	四六六、四六九
秋夕	四七〇
葎	四七一
紅葉	四七二、四七四
虫	四七五、四七六
紅葉	四七七、四八三
暮秋	四八四、四八九
惜秋	四九〇

〔秋の末に松虫を聞きて〕

冬部

時雨	四九一・四九二
きりぎりす	四九三
落葉	四九四・五〇〇
時雨	五〇一・五〇三
落葉	五〇四
枯れ草	五〇五・五〇九
冬歌	五一〇・五一三〔五一〇・五一一霜、五一二初雪、五一三冬の山里〕
霜	五一四・五一五〔五一四水辺寒草、五一五冬の山里〕
冬月	五一六・五二二
鷹狩	五二三・五二五
雪	五二六・五四三
あられ	五四四・五四六
炭がま	五四七
千鳥	五四八・五五三
水	五五四・五五六
冬歌十首	五五七・五六六〔五五七・五五八山里、五五九丸屋（津国）、五六〇・五六一氷（昆陽池・大井川）、五六二千鳥（木綿崎）、五六三山里、五六四氷（唐崎）、五六五雪（吉野山）、五六六山里〕
雪	五六七・五七〇
氷	五七一
歳暮	五七二・五七七



山里の春は、霞に包まれて訪れる。

山里に春立つといふこと

山里は 霞みわたれる けしきにて そらにや春の 立つを知るらん (七)  
谷の水が解けることで春を知る。

題しらず

春知れと 谷の細水 洩りぞくる 岩間の氷 ひま絶えにけり (一〇)  
また、鶯の声や梅の匂いが山住まいにも春らしさを伝えてくる。

閑中鶯

鶯の 声ぞ霞に もれてくる 人めともしき 春の山里 (二五)

春のほどは わが住む庵の 友になりて 古巢な出でそ 谷の鶯 (三〇)

心せん 賤が垣根の 梅はあやな よしなく過ぐる 人とどめけり (三六)

嵯峨に住みけるに、道を隔てて房の侍りけるより、梅の風に散りけるを  
主いかに 風わたるとて いとふらん よそにうれしき 梅の匂ひを (三八)

庵の前なりける梅を見てよみける

梅が香を 谷ふところに 吹きためて 入り来ん人に 染めよ春風 (三九)

伊勢に、もりやまと申す所に侍りけるに、庵に梅のかうばしく匂ひけるを

柴の庵に とくとく梅の 匂ひ来て やさしきかたも あるすみかかな (四〇)

しかし、西行の心は、春の訪れを聞くや、花（桜）の開花を待つて「うかれ」（二四九）落ち着かない。「花の歌あまたよみけるに」と詞書のある歌群から、例歌を引き、考察する。

吉野山 こずゑの花を 見し日より 心は身にも そはずなりきに (六六)

あくがるる 心はさても やまざくら 散りなんのちや 身にかへるべき (六七)

花見れば そのいはれとは なけれども 心のうちぞ 苦しかりける (六八)

ひきかへて 花見る春は 夜はなく 月見る秋は 昼なからなん (七一)

花散らで 月は曇らぬ よなりせば ものを思はぬ わが身ならまし (七二)

たぐひなき 花をし枝に 咲かすれば 桜にならぶ 木ぞなかりける (七三)

身をわけて 見ぬこずゑなく 尽くさばや よろづの山の 花の盛りを (七四)

桜咲く 四方の山辺を 兼ねるまに のどかに花を 見ぬ心地する (七五)

花に染む 心のいかで 残りけん 捨て果ててきと 思ふわが身に (七六)

願はくは 花のしたにて 春死なん そのきさらぎの 望月の頃 (七七)

仏には 桜の花を たてまつれ わが後の世を 人とぶらはば (七八)

山桜 霞のころも あつく着て この春だにも 風つつまなん (八〇)

今よりは 花見んに 伝へおかん 世を遁れつつ 山に住まへと (八六)

この歌群は吉野の桜を賞賛したものである。しかし、花の形状ではなく、花を見る西行自身の心の情態を詠んでいる。桜の客観的描写はほとんどなく、桜に対して詩人西行の主體的心が全霊をもつて呼びかける詠みぶりである。一首一首は別々に詠まれたにしても、ここに「花の歌あまたよみけるに」として配列された歌群をまとめているのは、八六である。西行の結論が集約されている。世を遁れてそれほど時の経てない時点での感慨であろうと想像されるが、つまり、山里の草庵生活での桜を見る心を強調しているのである。ここに挙げた例歌だけでなく、すべての花の歌に一貫してみられる傾向である。

夏歌では、五月雨（二二一、二二六など）が晴れると待つていたように旅に出る様子（二三七、二三八など）がみとれる。夏部二首目の一七五、終わってから二首目の二五二は次のような歌である。夏部においても山里の草庵生活の作であると言う編集方針は首尾一貫しているのである。

夏歌中に

草しげる 道刈りあけて 山里は 花見し人の 心をぞ知る （一七五）

山家待秋

山里は そとものまきさ 葉をしげみ 裏吹きかへす 秋を待つかな （二五二）

秋歌は、「身にしむ」ものがなしさを基調にしている。山辺を吹く風にしても、草花にしても、雁や鹿や虫の声にしても、夕暮れにしてもである。とくに、春の花の対して、「いにしへ」から「心うかれし」（三四九）月の歌が中心にある。花の場合と同様で、具体的な月のある景色を詠んでいるのではなく、月に対して西行自身の心の様態を

吐露している。多くの作はイメージを形成するための趣向や技巧は弄せずに、直接的に心を表現している。そして、その心は、山里の草庵から、あるいは旅の途上で、月を眺めている遁世者のものなのである。

山里は 秋の末にぞ 思ひしる 悲しかりけり 木枯の風 (四八七)

こうして冬がくる。冬の山里はとりわけ厳しい。あたりの霜枯れの中で寂しさはいよいよ募る。

冬歌十首

花も枯れ 紅葉も散らぬ 山里は さびしさをまた 訪ふ人もがな (五五七)

山里は しぐれし頃の さびしさに 嵐の音は ややまさりけり (五六三)

山ごとに さびしからじと はげむべし 煙こめたり 小野の山里 (五六六)

山家冬深

訪ふ人は 初雪をこそ 分け來しか 路とちてけり み山辺の里 (五六九)

山居雪

年のうちは 訪ふ人さらに あらじかし 雪も山路も 深き住処を (五七〇)

世を通して、鞍馬の奥に侍りけるに、笕氷りて、水まうで来ざりけり。

春になるまでかく侍るなりと申しけるを聞きて、よめる

わりなしや 氷る笕の 水ゆゑに 思ひ捨ててし 春の待たるる (五七一)

『山家集』の四季部の歌を見てみると、伝統的な四季の景物が歌題となっているが、草庵生活が詠作の場に設定されており、またその体験を積極的にふまえ、旧来の趣向にとらわれず自在に表現していることが知られる。出家の結果が、ここに解説した和歌作品であったと言えるのである。花や月などの自然を凝視する純粹な心を磨き表出し得たのは、前述したような寂寥を旨とした孤絶した草庵生活の実践があったからこそだと思われるのである。すなわち、生き方自体が西行の場合、その文学的主張であったと思われる。さらに言えば、自らの生き方を芸術化しようとする姿勢が窺えると思う。これは、例えば『平家物語』が描いている劇的な武士の生きざま死にざまに共通する。西行に中世の武士的資質を見いだせると思う所以である。ただし、ここに述べた出家と草庵生活は西行の和歌活動あるいは人生、仏道修行にとって、その出発であり基礎であったことを重ねて付言しておきたい。

〔付記〕本稿は大阪市大学開放講座、相愛大学・相愛女子短期大学市民教養講座「日本文学の点描」で担当した「西行の和歌」と題する講義のために書き下ろしたものである。